

君よ憤怒の河を渉れ

2007(平成19)年11月17日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

★★★★



監督・脚本=佐藤純彌/出演=高倉健/原田芳雄/池部良/大滝秀治/中野良子/倍賞美津子/岡田英次/西村晃/田中邦衛/伊佐山ひろ子(松竹配給/1976年日本映画/151分)

第2章

映像が先か、活字が先か

……史上最も多くの中国人が観たという日本映画を今鑑賞したのは、『坂和的中国電影大観』パート2を企画中のため。社会派ドラマ+アクションドラマそしてサービス精神充実のこの大作は、70年代のテイストが満載！ とりわけ新宿西口での機動隊のジュラルミンの盾に向かう、馬たちの暴走騒擾は圧巻！ また同じ検事でも、『HERO』のキムタクと「憤怒」のためハチャメチャな行動に及ぶケンさんとは、その位置づけが大違い。さて、あなたは30年という年月の経過をどのように総括……？

今はキムタク、昔はケンさん……

2006年の『武士の一分』に続いて2007年はキムタクこと木村拓哉の主演作『HERO』が大ヒットしているが、『HERO』でのキムタクの役は庶民派検事。スーツ、ネクタイ姿のお固いイメージを打ち破り、「中卒」の「スーツを着ない」「型破り」の若手検事だ。『君よ憤怒の河を渉れ』でケンさんこと高倉健が扮する杜丘冬人も東京地検の検事だが、この映画はまさにタイトルどおり無実の罪を着せられた現職検事が犯人を追っていくスリル満点の(?)アクション映画で、ラスト近くではケンさんの「さすが、役者やのう……」と感心させられるシーンも……。

ちなみにケンさんは1931年生まれ。そしてこの映画は1976年公開だから、当時45歳。ところが、主人公杜丘冬人の年齢は36歳だから9歳もサバを読んでいることになる。しかし、さすが渋くてカッコいいケンさんの雰囲気からは36歳がしっかりキープされている、と私は思ったが……。

中国国民の80%が観た……？

今回の「中国映画の全貌2007」のラインナップは、「日本映画と中国」として『君よ憤怒の河を渉れ』『乳泉村の子』（91年）、『蟻の兵隊』（05年）の3本が組み込まれている。そして『君よ憤怒の河を渉れ』については、①「文革直後の中国を熱狂させた作品」、②「99年の調査では中国国民の実に80%が観たという」、③「つまり史上最も多くの人が観た日本映画」、という3つのふれ込みがある。

この99年の調査がどんなものか知らないが、いくら何でも13億の中国人民の80%すなわち10億人以上が観たというのはちょっと調査方法に問題があるのでは……？
ちなみに中野良子に関するネット情報によれば、『君よ憤怒の河を渉れ』が1979年に中国で上映された結果、「ヒロイン『真由美』は強い支持を得て、8億人以上が視聴し、中国でも人気女優となる」と書かれているから、やはり8割以上はちょっと誇大気味……？

もっとも、「史上最も多くの人が観た日本映画」というのは感覚的には正しいようで、これによって高倉健は中国で超有名となり、ついには張藝謀^{チエンイーモウ}とケンさんのコラボが『単騎、千里を走る。』（05年）で実現することに……。

1970年代のテイストが満載

私は佐藤純彌が監督し高倉健が主演した『新幹線大爆破』（75年）を公開当直面白く観たが、この『君よ憤怒の河を渉れ』は観ていなかったし、テレビでも観たことがなかった。そのため、ストーリーは全く知らなかった。しかし、今年10月10日の北京電影学院での特別講義を契機として、中国語版の『坂和的中国電影論』の出版を企画している今、中国国民の80%が観たというこの映画はしっかり確認しておかなくてはという、半分義務感で鑑賞した。

そこで思ったのは、佐藤純彌監督の個性に負うところが大きいのだろうが、ホントに1970年代のテイストが満載だということ。すなわち、①テーマとしては、政治の裏に潜む巨悪と闘う正義派検事という社会派色、②映画のつくり方としては、サスペンスアクション映画、③ストーリー展開としては、ハラハラドキドキ感やできすぎ感を含めながら、基本的にオーソドックス……？

他方、観客（特に男性観客）に対しては、洞窟の中で男女の愛を交わすシーンやホ

テルの部屋で突然中野良子がヌードを見せるシーン、さらにケンさんが精神遮断の新薬 AX によって廃人同様にされる姿の演技などのサービス精神も……。さらにこの映画で面白いのが音楽。それは社会派サスペンス、アクション映画にはちょっと似つかわしくない、アップテンポでとぼけた味(?)のもの。2時間半という長尺モノながら多くの中国人民の目をスクリーンに注目させたのは、こんなさまざまな要素がうまくミックスされていたため……?

1976年当時つまり私が弁護士登録した2年目にこの映画を観たとしたら、その時の感想はこれとは全く違うものになっていたと思うが、31年後の今の私の感想はそんなもの。

坂和流ポイント その1——杜丘冬人は意外と単細胞……?

この映画は既に多くの人が観ているはず。したがって、ここでストーリー紹介をしても仕方ないのでそれは一切省略し、私なりのポイントをいくつか指摘したい。その第1は、杜丘冬人は現職検事で沈着冷静、常に合理的な意思決定をし、それに沿った行動をとるはずだと想定されているにもかかわらず、現実には正反対で、なぜこんな行動を? と思える無茶な行動ばかりだということ。

これは、①自宅での現場検証からの逃走、②杜丘を強盗強姦犯人だと名指した水沢恵子(伊佐山ひろ子)の死体を能登金剛で発見した時の、平気で指紋を残す素人探偵ぶり、③杜丘を窃盗犯だと名指した寺田俊明(田中邦衛)の自宅を北海道に何の用心もなく訪れる間抜けさと、これがワナだとわかった時の単純な逃走ぶり。等々並べたてればキリがないほど多い。

もっともこの映画では、結果的にその単細胞的な行動のミスを救ってくれる人物が登場する。それが、①水沢恵子の住んでいたアパートの管理人、②「命の恩人」である杜丘に一目ボレする遠波真由美(中野良子)、③杜丘にセスナをくれてやるという太っ腹なところを見せた北海道知事選の候補者の遠波善紀(大滝秀治)、④やっと東京に戻ったもののフラフラで倒れかけている杜丘を助けてくれたバーのホステス大月京子(倍賞美津子)等々だ。

杜丘があまりに完璧すぎる人間だとマット・デイモン主演のボーンシリーズ最終章にあたる第3弾『ボーン・アルティメイタム』(07年)のようなスーパーマンになってしまって面白くないが、ケンさん扮する杜丘のように、単細胞で意外にミスばかり

やっていると人間味があるから逆に味方が増えるもの……。ちなみに『項羽と劉邦—その愛と興亡 完全版』(94年)をみても、結局は何事にも完璧な項羽が敗れ、欠点だらけだが応援する人材をたくさん味方につけた劉邦が勝ったのと同じようなもの……？

🎬坂和流ポイント その2——政治絡みの物語はもう少し早く

この映画では杜丘は東京地検の検事というだけで、「特捜部のエリート検事」というふれ込みではない。したがって、杜丘がなぜ寺田俊明や水沢恵子の名指しによって、強盗強姦や窃盗の犯人に仕立てあげられていったのかの謎解きのヒントがつかみにくい。それが少しずつ見えてくるのは、北海道の日高山中の林の中に逃げ込んだ杜丘が1人静かに「俺にワナをかけただけではなく、命まで狙ってくる奴は誰だ」と考えた時。そこで杜丘は、政界の大物長岡了介(西村晃)の目の前で朝倉代議士がレストランの窓をつき破って飛び降り自殺をとげた事件を思い出すわけだ。目撃証人がたくさんいる中での常軌を逸した行動だから、それが自殺と断定されたのは当然だが、ひとり杜丘だけは他殺の線で勝手な捜査をしていたことがあったのだ。

映画後半は、この政治(の裏)絡みの話が大きなポイントになるが、『君よ憤怒の河を渉れ』は、古くは社会派を代表する山本薩夫監督の『金環蝕』(75年)、近時は原田真人監督の『金融腐蝕列島・呪縛』(99年)のような本格的な社会派ドラマではなく、あくまでケンさんのアクションを盛り上げるための背景としての位置づけ……。しかし、この話は少しわかりにくいから、前半にもう少し多くのヒントを提示して観客に考えさせた方がよかったのでは……？

🎬坂和流ポイント その3——映画なればこそ

ポイントその3は、映画なればこそその約束ゴトがすごく多いこと。その第1は、この映画には熊が2度登場してくるが、2度ともあまりにもいいタイミングで登場し、やるべき役割をきっちり果たし、そして静かに消えていく。第2は、いくらセスナの操縦が車の運転以上に簡単だと言っても、はじめて操縦桿を握って北海道から東京まで無事に飛べるの……。さらに海上への不時着という決死ワザまでも……。こんなに簡単にセスナの操縦ができるのなら、パイロット免許って一体ナニ……？

第3は、新宿西口での馬の暴走シーン。これはこの映画の売りの1つだが、なぜ機

動隊は馬に向けて拳銃を発射しないの？ それを命令できる指揮官もいないとなれば、そんな機動隊では国内の治安維持はとてとても……？

第4は、北海道の寺田俊明宅では待ち伏せしていた刑事たちから、そして新宿では血まなこになって捜していた刑事たちから杜丘は追われるわけだが、なぜか杜丘の足が異常に(?)速いため、刑事たちは拳銃発射までしながらこれを取り逃がしてしまうこと。

検事は知的エリートの背広組だが、刑事は肉体派として毎日柔道、剣道の稽古に励んでいるジャンパー派のはず。しかも、相手は1人に対してこちらは多勢。それでも重要指名手配の犯人を取り逃がし逮捕できないようでは、日本の警察の信用はガタ落ちだが……？

まあ、以上の4点は別にケチをつけているのではなく、映画なればこそその設定が徹底している娯楽作品だと誉めているつもり……。

杜丘だけではなく矢村警部にも注目！

この映画は中国ではケンさんのみが注目されたが、昨今渋い役者として『父と暮せば』(04年)や『オリオン座からの招待状』(07年)などで存在感を示している原田芳雄が本庁の矢村警部として登場する。彼は杜丘のことをよく知っているが、「俺のことを信じないのか？」という杜丘に対して「ああ、俺は誰も信じないよ」とクールに(ニヒルに?)答え、その後、水沢恵子の殺人容疑に切り換えられた捜査の責任者として執拗に杜丘を追っていく重要な役割を果たすことになる。

今ドキは『踊る大捜査線 THE MOVIE』(98年)の織田裕二扮する青島刑事をみても、真面目で優秀な若手刑事が大人気。しかし、1960年代後半の高揚していた学生運動が既に衰退した1976年当時の刑事像は反権力の色あいが濃厚。したがって、矢村警部は何かと「会議の結果〇〇と決まった」と体面を保つことにこだわり、コトなかれの処理にウエイトを置く東京地検の検事正伊藤(池部良)とは何かと対立しがち。もっとも、そこは対立しても負けるとわかっている矢村警部は利口だから、「ああそうですか」と軽く受け流しながら、いつも「オレ流」を……。このように対比してみると、やはり理想のタイプ(?)の刑事像も30年も経てば大きく変わるものか……？

この映画は、追われる杜丘とこれを追う矢村警部との硬派で奇妙な男同士の信頼と

友情が大きなテーマ。その丁々発止のやりとりはきっと多くの男性ファンを魅了するはずだ。しかもラストでは、あっと驚く2人の共演が……。弁護士の私の目にはいくら何でもこりゃないだろうと見えるが、これも映画なればこそそのもの。そして、この映画を観た観客を欲求不満のまま帰らせるわけにはいかないと考えた佐藤純彌監督のサービス精神のあらわれ……。そんな、原田芳雄の演技にも注目を！

当時注目の中野良子が……

また、1971年の『二人だけの朝』でデビューした中野良子は女優として旬の時期。観る角度によっては吉永小百合そっくりに見えることもある(?)が、吉永小百合以上の個性的な美女(?)として、1972年のテレビドラマ『光る海』以降私が大好きだったのがこの中野良子。

その中野良子が『君よ憤怒の河を渉れ』において、チェックのロングスカートをはき、長い髪をなびかせながら馬の上にまたがり、さっそうと疾走する姿は実にカッコいいもの。もっとも、それは本来北海道の草原が一番似合うもので、新宿の繁華街ではそもそも似合わないはず。しかし映画後半には、新宿西口で待ちあわせた杜丘を拾った真由美があっと驚く大騒擾を……。機動隊のジュラルミンの盾を馬の疾走で蹴飛ばすという佐藤純彌監督の発想は、1968年の新宿騒擾事件など、あの時代の学生運動の実態や機動隊との衝突場面を知らなければ思いつかないはず……。

正当防衛とは……？ 緊急避難とは……？

杜丘が何としても東京に戻らなければならないのは、自分を窃盗犯人に仕立てあげた寺田を見つけ出し真相を聞き出すため。ところが寺田は、AX薬を開発した悪徳医師堂塔正康(岡田英次)の経営する精神病院の中に隔離されており、矢村警部ですら面会することができないのが現状。そんな中、ラストに向けて文字どおりケンさんの体当たり演技が展開されていき、最終的に杜丘と矢村警部の2人による拳銃発砲となるのだが、面白いのはその後始末のつけ方。

いくら「憤怒」のためとはいえ、政界の黒幕長岡了介が拳銃の弾によって殺されたのはまぎれもない事実。また、その場にいたのが杜丘と矢村警部の2人だけだったことも否定できない事実。そこで便利な法律用語が正当防衛と緊急避難だが、この映画でのその法解釈は……。1970年代はこの程度の法解釈でまかり通っていたのかと

考えると、ホントに70年代はいい時代……？

ケンさんのラストはやはり『昭和残侠传』……？

さあ、いよいよ映画はラストになるが、佐藤純彌監督はケンさんを検事として登場させたこの映画にどんなカッコいいラストシーンを用意しているのだろうか……？ ケンさんの代表シリーズ『昭和残侠传』のラストシーンはいつもケンさんのうしろ姿……？ もちろんそれはいつもたった1人……？

しかし、今回はケンさんを迎える真由美がいるから、多少雰囲気が違うよう。そこで交わされる会話その1は、「終わったの」「いや終わりはないよ」という意味シなもの。そして会話その2は、真由美からの「一緒に行ってもいい」という問いかけだが、それに対するケンさんの回答はなし。そして、ただ黙って真由美の肩を抱き、どこへともなく歩き始めるもの。いや～、こんなカッコいいラストシーンは、『昭和残侠传』そのもの……？

2007(平成19)年11月20日記